様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 20 日現在

機関番号：24301
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20520125
研究課題名（和文）能の謡の音数律を構造化する

研究課題名（英文）Structuring the metrics of Noh chanting

研究代表者 藤田　隆則
（FUJITA Takanori）
京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター・准教授
研究者番号：20209050

研究成果の概要（和文）：
能のテクストは、７５調を基本とするが、すべてが７５調で書かれているわけではなく、多くの例外句を含んでいる。一句一句の文字数の多少が、音曲の構成上の変化を生み出しているのである。その効果について考えるためには基礎的な資料が必要である。この研究では、能の５０曲をとりあげ、一句一句の音数律を示し、旋律のおおまかなかたちがわかるような記号も付与した。文字数の多少がもつ音楽的意味を考えるのが今後の課題である。

研究成果の概要（英文）：
The chanting text of Noh drama is metrically written with using 7+5 syllables' structure. However, it contains many phrases with exceptional number of syllables such as 5+5, that bring about structural variations of melody among pieces. Basic data is needed in order to consider the effects brought by those exceptional phrases. In this project, I picked up 50 pieces of Noh chanting and showed all the sung phrases line by line with showing outline of melody. We are to consider the musical intention of putting exceptional phrases in song text.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：民族音楽学

科研費の分科・細目：芸術学・芸能史・芸術一般（2851）

キーワード：音数律，謡曲，能，音曲，中世芸能，旋律，産み字，ふし

１．研究開始当初の背景

能の謡の音数律(句の文字数の配分構成)は、拍節や旋律パタンを生みだす重要な規範、つまり謡の作曲法研究を展開するための基盤として重要であるが、1963 年、横道萬里雄が著書『謡曲集』下（岩波書店）において展開した予備的考察を除いては、作曲法解明という文脈で、謡の音数律に注目

した研究は皆無であったといえる。横道は、七五調にもとづいた文章を「定律文」、そこから逸脱したものを「破律文」と名付けているのだが、「破律」の文章に対して分析が行われていないのは、惜しいことである。定まった音数律からははずれるものでもあっても、能の作者や時代などによって、例外句の使い方に、それなりのパターンや規則が認められるのではないだろうか。それを見出すことができるならば、日本音楽史、演劇史、作品史の上で、何らかの新しい展望が得られるのではないか。このような考えにもとづいて、研究がはじめられた。

２．研究の目的

音数律は、文学的な形式としての意味をもつだけではなく、拍節や旋律のパタンを拘束する第一の規範である。言い換えれば、それは音曲の作曲のための、第一の規範なのである。そういう視点で、能の重要な作品の音数律を眺めわたし、それと旋律との関係を見る作業が必要である。それを可能にする基礎資料が、謡の音数律が一覧できる図表である。この図表はまた、将来の能の作曲法研究、および世阿弥伝書をはじめとする謡や音曲伝書の解釈をおこなうさいの、基盤材料を提供するものともなりうる。

音数律の研究をすすめるためは、能の音楽学研究の蓄積、文学史的な研究の蓄積に対しての目配りだけではなく、国語学のなかの音韻研究史に対しての、広範な目配りが必要となる。従来、音曲、音楽研究にたずさわる者は、国語学や文学史との連携をあまりもっておらず、基礎的な知識ももちあわせない状況であった。この状況をすこしでも変えていくために、節について解説した歴史的書物だけでなく、国語学研究の基本的書物を蒐集し、そこで積み重ねられてきた音韻研究に対しても目をむけ、音曲研究への利用可能性をさぐっていく。

３．研究の方法

研究開始当初、具体的作業として３つをあげた。

（１）作品の分析

能の作品中、世阿弥以前の作 20 曲、世阿弥の作 21 曲、元雅作 4 曲、禅竹作 4 曲、など全 50 曲を分析対象とする。対象となるひとつひとつの作品に対して本文校定を行なった上で、校定された本文を、句ごとに行換えしながら、コンピュータに入力する。その本文にもとづいて、音数律を確定する作業をおこなう。また、入力されたそれぞれの句について、特別な節付けが行なわれている場合、そこに印をつけ、その存在を明示しておく。

（２）クセの構造

選択した作品の中の多くには、クセと呼ばれるひとまとまりの音曲が、部分として存在している。クセの部分には、音数律の解釈が難しいところもある。クセのみを集めて、より綿密な分析のためのコーパス(全体像）を画定する。これをもとにして、音数律を基礎とした旋律や拍節の構造図の作成にかかる。

（３）基礎文献の蒐集

以上の実際的作業と並行して、謡曲の伝書の蒐集をおこなう。江戸期の謡曲伝書の中でも、節（フシ）に焦点をあてて、詳しい解説をおこなっているものが多種存在する。また、近代にはいると、素人の謡曲愛好家のために、節（フシ）の謡い方についての解説書が、おおく出版された。それぞれの教本には、個々の節の説明や歌い方の技法などが示されている。能の謡の流派と時代にかかわりなく、節（フシ）に関連する文献を蒐集し、目録化する作業を開始する。

以上が、研究開始当初にさだめた方法および目標である。

４．研究成果

作業は（１）を中心にして行われ、研究成果として、次のようなデータが得られた。

（１）全 50 曲の音数律表

これは、この研究の中心をなすものである。50 曲において節がつけられている部分だけをとりあげ、それぞれの句の上の句と下の句の文字数のバリエーションがよくわかるように排列して示した。また、その右側に「上」「下」「ハル」「中」など、旋律の骨格をしめすに、必要十分な記号をとりあげて付記した（本報告書の添付資料１）。この資料は、まず、50 曲の小段をしめし、その中で、節のついている部分の文言をすべて書き出し、それらを七五調にあてはめて書き出したものである。能の一句一句の多くは七五調である。そして上の句、下の句それぞれに字余りや字不足があるため、上の句と下の句の切れ目の位置をたてにそろえてならべ、上の句と下の句の文字数の多少を一覧できるようにした。こういった一覧表をつくったことによって、たとえば、ひとまとまりの謡がおわる一句前では、多くの場合、上の句の文字数が七文字よりも少ない等、が確認できた。字不足の句が、その謡の部分終了の合図を発しているわけである。

他にもさまざまな発見があるが、作者による文字数処理のちがいについては、まだこれまで言われている以上のことは発見できて

いないので、今後、この表をじっくりとながめる時間的余裕が必要とされる。

（２）能の人物登場部分の音曲構成表
この研究の副産物として、能の曲の小段表ができあがった。その表をもとにして、能の登場人物がうたう音曲がどのような排列になっているか、その類型をしめす表を作成した（本報告書の添付資料２）。能の登場人物は、さまざまな出囃子で登場するが、代表的な出囃子が「次第」と「一声」である。その両方の出囃子がどのような作品においてつかわれているかを一覧できる表を作成し、能の定型と、その定型が生まれる以前の形をさぐるための仮説がいくつかうまれた。このことについては、三年間の研究期間をおえた直後の平成 23 年５月７日に学会発表をおこなった（能楽学会)。

（３）雑誌『観世』『大観世』データベース
資料収集の一環として雑誌の目次のデータベース化をおこなった。最初は雑誌『観世』の創刊号から昭和 19 年の休刊までの目次データベースを作成し、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターのホームページにおいて公開した。３年目には、雑誌『大観世』の１号から１１０号までの目次データベースを作成し、同センターのホームページでの公開にこぎつけた。

（４）京観世の謡にかんする基礎資料
資料収集の過程で、京都に伝承される京観世の資料収集に焦点があてられた。謡がうたわれる文化の広がりをしめす資料の紹介をおこなった。京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターがおこなった公開講座「京観世の伝統」の資料の一部分として公開された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

平成 22 年度
① 藤田隆則「同音という指標―中世芸能のウタイとコトバ」『口承文芸研究』33 号、2010 年、pp.140-145　査読無し

平成 21 年度
② 藤田隆則「能と狂言における下り羽・渡り拍子・囃子物・シャギリ―登場から退場への構造」植木行宣・田井竜一（共編）『祇園囃子の源流』岩田書院、2010 年、pp. 267-289 査読無し
③ 藤田隆則「歴史史料としての口頭伝承（録音資料）―京観世の強吟」『芸能史研究』187 号、2009 年、pp.59-68　査読無し

平成 20 年度
④ 藤田隆則(Takanori Fujita) ″No and Kyogen: music from the medieval,″ In Alison McQueen Tokita and David W. Hughes (eds.) *The Ashgate Research Companion to Japanese Music*. (Aldershot, England: Ashgate Publishing Ltd., 2009), translated by Alison Tokita, pp. 127-144. 査読なし

〔学会発表〕（計９件）

平成 22 年度
① 藤田隆則「能のノリ、地拍子、音数律」歴史的認知音楽学研究会、2010.12.18、奈良：奈良女子大学
② 藤田隆則（英語による講演、中国語通訳付）’Transmission of Japanese Buddhist Chant and its Notation’音楽学論壇、中国：上海音楽学院（2011 年 3 月 22 日)、武漢音楽学院（2011 年 3 月 24 日）
③ 藤田隆則（日本語による講演、中国語通訳付)「能、文楽、歌舞伎を物語の語り方という観点から比較する」音楽学論壇、中国：武漢音楽学院（2011 年 3 月 23 日)、上海音楽学院（2011 年 3 月 25 日）

平成 21 年度
④ 藤田隆則「同音という指標―日本の中世芸能におけるウタイとコトバ」日本口承文芸学会大会シンポジウム「ウタとカタリ―比較歌謡研究の現場から」2009.6.7、奈良市：奈良教育大学
⑤ 藤田隆則「音資料からわかることと新たな課題―謡の強吟の歴史研究をつうじて」芸能史研究会大会、2009.6.14、京都市：同志社女子大学
⑥ 藤田隆則(Takanori Fujita)‘Masculinity expressed through distortion of musical scale in singing of Japanese Noh drama.’ International Council for Traditional Music 40th World Conference. Durban, South Africa: University of Kwazulu-Natal. 2009.7.2
⑦ 藤田隆則「日本の民謡の旋律における言語規範―兼常の民謡論ほかを読む」共同研究「民謡研究の新しい方向」（代表：細川周平）2009.11.28、京都市：国際日本文化研究センター

平成 20 年度
⑧ 藤田隆則「大江幸若舞の復元・暗誦手法―範列化・組織化・ルーティン化・冗長性」

日本音楽学会関西支部例会、2008.7.19、福岡市：西南学院大学
⑨　藤田隆則「京観世の謡いぶり―録音、謡本、伝書から」能楽学会第 12 回能楽フォーラム「謡と謡本―京観世の謡」、2009.3.14　、神戸市：神戸女子大学

〔図書〕（計１件）
①　藤田隆則（単行本）『能のノリと地拍子―リズムの民族音楽学』檜書店、2010年２月、全270p　（科学研究費補助金研究成果公開促進費による出版）

〔産業財産権〕
なし

〔その他〕
ホームページ等

雑誌『観世』および雑誌『大観世』の目次データベース

『観世・大観世』目次一覧（大正 12 年１月ー昭和19年３月）
http://www.kcua.ac.jp/databases/kanze-daikanze/index.php

６．研究組織

(1)研究代表者
藤田　隆則　（FUJITA TAKANORI）
京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター・准教授
研究者番号：20209050